

# 初代ブルゴーニュ公フィリップ豪胆公の祈禱者像と 祈禱者像のブランド化をめぐる

今 井 澄 子

## はじめに

ヴァロワ家ブルゴーニュ公国は、1363年に、ときのフランス王ジャン二世（在位1350～64年）の末子フィリップが、フランス北東部に位置するブルゴーニュの地を譲り受け初代の公（豪胆公）となったことに始まる<sup>(1)</sup>。二代目ジャン無畏公（在位1404～19年）、三代目フィリップ善良公（在位1419～67年）の時代にブルゴーニュ地方から北へと勢力を伸ばし、隣国を脅かす勢いで勢力を拡大したこの公国は、四代目のシャルル突進公（在位1467～77年）が戦死しハプスブルク家に吸収されるまで百年余りも繁栄した。

ブルゴーニュ公国は、公国内外で手本とされるほどの洗練された宮廷文化を営んだことでも知られる<sup>(2)</sup>。その芸術保護に関しては、ヤン・ファン・エイク（1390頃～1441年）やロヒール・ファン・デル・ウェイデン（1399/1400～1464年）などの巨匠たちによって15世紀にもたらされた初期フランドル（ネーデルラント）画派の興隆とあいまって、ブリュッセルに拠点を置いたフィリップ善良公やシャルル突進公の時代の繁栄に注目が集まることが多い。とはいえ、2004年から2005年にかけてディジョンとクリーブランドで開催された展覧会が詳細に示したように、初代ブルゴーニュ公も意欲的に芸術保護を行い、豊かなコレクションを残した<sup>(3)</sup>。のちのブルゴーニュ宮廷の文化的繁栄は、フィリップ豪胆公が注文・蒐集した芸術品や書物が次代の公へと継承され、さらに積み重ねられていったからこそ成立したのである。その際に、当時稀にみる蔵書数を誇ったブルゴーニュ公の「図書室」が担った役割は重要である<sup>(4)</sup>。「図書室」に所蔵されたのは聖書や祈禱書、説教集、あるいはローマ史や世俗文学など多岐にわたる書物であり、それぞれに美しい挿絵が施された。そこからは、ブルゴーニュ公とその宮廷で共有されたであろう重厚な知的世界と美的嗜好をうかがうことができる。

本稿では、フィリップ豪胆公が所蔵した書物のなかから、今日、ケンブリッジとブリュッセルに分蔵されている『フィリップ豪胆公の大時禱書』および『フィリップ豪胆公の祈禱書』（図10～図16）に着目したい。時禱書は、当時、平信徒の間で人気を博した祈りの書であるが、公が日常的に使用したと伝えられるこの時禱書群には、ブルゴーニュ公の信仰に対する態度を読み取ることができるばかりでなく、公と同定できる人物が跪き祈る姿を表わした「祈禱者像」が随所に描かれているという点でも注目すべき作品である。さらに興味深いのは、これらの書が三代目公となったフィリップ善良公の時代に再編纂され、新たに挿絵が加えられたという点である。

本稿以下では、まず、フィリップ豪胆公がブルゴーニュ公となるまでの経緯と、ブルゴーニュ公としての社会的立場を確認する。つぎに、公の姿がどのように表わされたのかという点を、各種の肖像から検討する。そして『フィリップ豪胆公の大時禱書』の成立事情と構成を確認したうえで、豪胆公が跪き祈る祈禱者像の描写について、その特徴と系譜を探究する。最後に、フィリップ豪胆公の祈禱者像とフィリップ善良公の祈禱者像との比較・分析を通して、ブルゴーニュ公の芸術保護とその継承のあり方を探りたい。

## 1. フィリップ豪胆公の肖像

### (1) フィリップ豪胆公の芸術保護

フィリップ豪胆公は、イングランドとフランスの間で断続的に続いた百年戦争の最中の1342年1月17日に、のちにフランス・ヴァロワ朝の王となるジャン二世の四男として生まれた<sup>(5)</sup>。フィリップの兄には、ジャン二世を継いでフランス王となったシャルル五世（在位1364～80年）やアンジュー公ルイ（在位1360～84年）、そしてベリー公ジャン（在位1360～1416年）などがおり、各々がフランス宮廷の権力者として活躍した。

1356年に英仏間で「ポワティエの戦い」が起これば、フィリップは10代前半の若さで参戦し、父王ジャン二世に従って奮闘した。フランス側は惨敗を喫したが、フィリップの戦いぶりの勇敢さは大いにたたえられた。これが、彼が「豪胆公」と呼ばれるようになった由来である<sup>(6)</sup>。そして、1360年にトゥーレーヌ領を与えられたが、1363年にはトゥーレーヌの代わりにブルゴーニュ領を得てブルゴーニュ公となり（図6）、1364年11月26日にブルゴーニュの中心都市ディジョンへと入市した。1369年にはマルグリット・ド・フランドル（＝ド・ダンピエール、1350～1405年）を妻に迎え、6月19日にはフランドルの都市ヘントで結婚式が挙行された。『フランス大年代記』には、教会扉口の前で、司祭の仲介により新郎新婦が手を結ぼうとする様子が描かれている（図7）<sup>(7)</sup>。そして、マルグリットの父にしてフランドル伯のルイ・ド・マールが1384年に亡くなると、マルグリットとフィリップ豪胆公がフランドル伯位を相続することとなる。

1385年には、フィリップ豪胆公夫妻の長男ジャン（のちの無畏公）が、マルグリット・ド・バヴィエール（1363～1423年）と結婚する。都市カンブレでは、二人の結婚式と同時に、マルグリットの弟ヴィルヘルムとフィリップ夫妻の娘マルグリット（＝ジャンの妹）の婚礼もとり行われた。マルグリット・ド・バヴィエールとヴィルヘルムの父アルブレヒト一世（1336～1404年）は、エノー伯やホラント伯などの称号を手にしていたため、ブルゴーニュ公領は、この二重結婚により、北方のネーデルラントへと進出する流れを加速させた。フィリップはシャルル五世の後を継いだシャルル六世（在位1380～1420年）の摂政をつとめたばかりでなく、シャルルが成長し王の親政へと移行した後も王政に関与し続けた。著作家クリスティーヌ・ド・ピザン（1364～1430年頃）は、シャルル五世の伝記を著わすなかで、フィリップ豪胆公のことを「政治手腕に長け、膨大な見識を持ち、フランス王国を拡大させるべく多大な貢献を熱心に行った王子」とたたえている<sup>(8)</sup>。そこには、この伝記を執筆するようにと求めたフィリップ豪胆公への配慮が含まれていた可能性を差し引いても、豪胆公がフランス王家の一員として巧みに立ち回っていたであろうことがうかがえる。彼の労力と情熱は、むしろ自身のブルゴーニュ公国を繁栄させるためにも注がれた。

フィリップ豪胆公は、芸術保護にも熱心であった。その態度は、ゼロから新しい文化を築きあげるような改革者のものではなく「当時の王侯の流行に従った」に過ぎないとも位置づけられるが<sup>(9)</sup>、各地に城館や邸宅を新しくもうけ、それぞれの建物を飾るための家具調度品や美術工芸品を熱心に取り揃えた。なかでも、豪胆公夫妻の所有したタペストリー・コレクションは特筆すべき豪華さを誇り、都市アラスで営まれたタペストリー工房はヨーロッパ中に名を馳せた<sup>(10)</sup>。

フィリップ豪胆公は、ディジョン近郊シャンモルのカルトゥジオ修道会の再建も行った。1383年に礎石が据えられると、この修道院は、新たなブルゴーニュ公の墓所としての役割も担った。修道院の装飾は、彫刻家クラウス・スリュートル（1340頃～1405/06年頃）や画家メルキオール・ブルーデルラム（1350頃～1409年以降）などブルゴーニュの一流芸術家たちが登用されるなど、各種芸術の粋が集まる一大事業となった<sup>(11)</sup>。主要な建物は1388年頃にはほぼ完成したが、ジャン・ド・マルヴィルやスリュートルが携わっ

た棺の制作は、フィリップの生前に終了することはなかった。諸事情により、夫妻の墓碑彫刻は、翌年に亡くなった妻マルグリットの死後、さらに数年を要してようやく完成することとなる。今日、この墓碑彫刻は、哀悼の意を情感たっぷりに示す棺側面の彫刻「泣く男」たちとともに、この時代のブルゴーニュ公国の芸術の精華を伝えている（図5）<sup>(12)</sup>。

当時の王侯貴族の例に漏れず、ブルゴーニュ公の所蔵品や注文作品は、外交上の贈り物として利用されることも珍しくなかった<sup>(13)</sup>。たとえば1398年には、イングランド王族のジョン・オブ・ゴントが「ブルゴーニュ公から贈られたタペストリー一枚を」甥のリチャード二世に遺贈したことが伝えられている<sup>(14)</sup>。フィリップ豪胆公のコレクションは、所有者が私的に楽しむという次元に留まるものではなく、第三者の目に触れる可能性を踏まえて蒐集されるものであった。

フィリップ豪胆公の注文したさまざまな芸術品のなかでも、公とその家族の肖像は、公国内の聖堂の扉口や聖堂内部、あるいは有力都市の市庁舎などに設置されることで、人々の目に触れる機会を多く持った。以下では、ブルゴーニュ公としての立場を称揚し、その権威を誇示するという役割が託されていたであろうイメージとして、フィリップ豪胆公その人を表わした肖像の表現に注目したい。

## （2）フィリップ豪胆公の肖像

フィリップ豪胆公をはじめとする歴代のブルゴーニュ公は、彫刻・板絵・写本挿絵あるいは工芸品などの多様な媒体によって自身の姿を示した。フィリップ豪胆公の肖像については、板絵や彫刻のオリジナルはほぼ残されていない。だが、一定程度の大きさを持つコピー作品（図1～図3）にその容貌をうかがうことができる<sup>(15)</sup>。これらの作品において、豪胆公は、父ジャン二世の肖像画（パリ、ルーヴル美術館）のように、プロフィールで顔の左半分を見せ、帽子や襟には高価な宝石をきらめかせる。やや突き出た下顎は、子々孫々、ハプスブルク家の代に至っても顕著に受け継がれた身体的特徴である。

三点の肖像のうち、板絵の作品はもっとも遅い時期の作とみなされるが、自然主義的な様式で、公の顔立ちの特徴や、衣服の細かい質感までも丁寧な描きだしている（図1）。また、アラバスターの彫刻は、高さ15cm程度の小品ではあるが、かつてシャンモルの修道院の聖堂に飾られたフィリップ豪胆公の肖像をもっともよく再現する作品とみなされてきた（図3）<sup>(16)</sup>。その肖像は、ヴァロワ家の他の王子たちの肖像画とともに連作をなし、地下墓所へと続く階段の上に配置されていたと推定されている。

より小さい画面になるが、フィリップ豪胆公は、フランス王国やブルゴーニュ公国の歴史を綴った書の挿絵のなかに描かれることもあった（図6～図9）<sup>(17)</sup>。サイズの都合上、先に挙げた板絵や彫刻と比べると、その顔立ちは必ずしも克明に描写されていない。ここでは、人物のまとう衣服や甲冑に付された紋章の模様が本人を同定する一つの手がかりとなっている（図6、図8、図9）。フィリップ豪胆公やフランス宮廷関係者たちは、紋章要素やドゥヴィーズ（エンブレム）などの「サイン」を利用して本人であることを示す傾向が強かった<sup>(18)</sup>。

では、肖像の一形態として、聖なる人物に跪き祈る「祈禱者像」としてのフィリップ豪胆公は、どのように表わされたのであろうか。本稿では、豪胆公の生前に完成しシャンモルの修道院の聖堂扉口に設置されたとみなされる彫像に注目したい（図4）<sup>(19)</sup>。この像はほぼ等身大の大きさで、うえに挙げた肖像群とおおむね共通する目鼻立ちを持ち、洗礼者ヨハネに仲介されつつ、反対側で聖女カタリナにとりなされる妻マルグリットとともに、中央の聖母子像に跪き祈る。このように聖堂扉口で跪く祈禱者像は以前にも制作されたが、本作品に関しては、設置された場がブルゴーニュ公家の霊廟となるべく整えられていたことを見過ごしてはならない。ここには像主であるフィリップ豪胆公の信心が示されるばかりでなく<sup>(20)</sup>、神の代理人にして地上の支配者でもあるというブルゴーニュ公の立場が誇示されることになるからである。

それはとりもなおさず、いち信徒として聖なる祈禱対象を崇めるはずの祈禱者像が、支配者としての自身のステイタスを称揚するという別の機能を担うことを意味する。像主の存在は、中央の柱に立つ聖母を支える台座に刻まれた夫妻のイニシアルPとMによっても強調されている。このように、シャンモルの聖堂扉口に設置された公の祈禱者像には、聖なる人物への信仰と同時に、公としてのステイタスを誇示するような現世的かつ世俗的な態度もうかがえるのである。

フィリップ豪胆公の祈禱者像は、本人が所蔵した写本にも描き込まれた。以下では、主に『フィリップ豪胆公の時禱書』の分析を通して、フィリップの祈禱者像が担った役割を探究したい。

## 2. 『フィリップ豪胆公の大時禱書』と祈禱者像

### (1) 『フィリップ豪胆公の大時禱書』の概要

今日『フィリップ豪胆公の大時禱書』と通称される写本は、複雑な成立過程を持つ。まず、1376～78年頃にかけてパリで制作され、90年頃に再びパリ、そして1450～55年頃にブリュッセルで追加・編纂された。つまり、約80年にわたって少なくとも3回の制作期間があったことになる<sup>(21)</sup>。1376～78年頃の第一制作期には、名高いパリの写字家ジャン・ラヴェナンに対するフィリップ豪胆公からの支払い記録が残り、本写本との関連が認められている<sup>(22)</sup>。挿絵もパリで施され、大きな挿絵は主に「ジャン・ド・シの聖書の画家（ボクトーの画家）」とその工房、他の小挿絵の大部分は「シャルル五世の戴冠本の画家」の工房に属した画家たちによると推定されてきた<sup>(23)</sup>。次の第二制作期にも、フィリップ豪胆公の指示によって製本が解かれ、新たなページが加えられた。

1404年4月末にフィリップ豪胆公が亡くなると、本写本は、フィリップの他の所蔵本とともに、フィリップの息子で二代目ブルゴーニュ公となったジャンに相続された。1404年5月に作成されたジャン公の所蔵品目録には、本写本とそれに伴う祈禱書に言及したと同定される史料がある。

聖母・十字架・聖霊・死者の時禱、複数の祈禱、その他に複数のとりなしの祈禱をおさめた二冊の大きな本。わが公の祈禱室で日々使用するためのもの……<sup>(24)</sup>。

ジャンが1419年に暗殺されると、『フィリップ豪胆公の大時禱書』は、豪胆公の孫にあたる三代目ブルゴーニュ公フィリップ善良公へと受け継がれた。彼は1451年9月には、ブリュッセルの写本挿絵家で自身の「画家兼侍従」を務めたドリユー・ジャンに、テキストと挿絵の追加、および、おそらく『フィリップ豪胆公の大時禱書』を二冊に分割したことに対する支払いを行った<sup>(25)</sup>。テキストの追加には、同じくフィリップ善良公に仕えた写字家ジャン・ミエロ（1448～68年頃活動）も携わったと推定される。これらの書はのちにさらに分割され、一冊はフィッツウィリアム美術館（ケンブリッジ）に、残りはベルギー王立図書館（ブリュッセル）に伝わることとなった。ただし、失われたページ（フォリオ）も多いため、ブリュッセル所蔵の写本（MS 11035-37, およびMS 10392）がそれぞれ『フィリップ豪胆公の大時禱書』と『フィリップ豪胆公の祈禱書』と同定されたのは、ようやく20世紀後半になってからのことであった<sup>(26)</sup>。制作・編纂過程の細部には異説も出されているが、本稿では詳細には立ち入らない<sup>(27)</sup>。

現存する写本の構成を確認しておこう。ケンブリッジ所蔵の『フィリップ豪胆公の大時禱書』（MS 3-1954）は、一葉（フォリオ）25.3cm×17.8cmで275葉からなる。多くのフォリオが14世紀のオリジナルであるが、一部（約15葉）は15世紀に追加された<sup>(28)</sup>。ブリュッセル所蔵写本のうち、『フィリップ豪胆公の祈禱書』（MS 10392）は、一葉28.4×20.4cmで、計310葉を数える。1404年の目録で言及されていた「二冊の大きな本」のうちの二冊で、大時禱書に付随した祈禱書と同定できる。また、写本断片からなる一群（MS



11035-37) は、『フィリップ豪胆公の大時禱書』の一部を構成していたと考えられる。サイズはケンブリッジ所蔵本とほぼ同一の25×17cmで、144葉が残っている。19表葉から63表葉までが豪胆公時代のオリジナルであり、残りは後世の追加と推定される<sup>(29)</sup>。

このように、『フィリップ豪胆公の大時禱書』は長い制作経過をたどった写本であり、14世紀に制作された書の途中に15世紀の追加分が組みこまれるなどの込み入った構成となった。興味深いことに、そのなかには、フィリップ豪胆公の祈禱者像が多数見いだされる。以下では、この書に描かれた祈禱者フィリップ豪胆公の表現とその機能について分析したい。

## (2) フィリップ豪胆公の祈禱者像

『フィリップ豪胆公の大時禱書』と、この写本に付随した『フィリップ豪胆公の祈禱書』には、フィリップ豪胆公を描いたと推定される祈禱者像が20点も見いだされる。様式的な見地からも、主に第一制作期に描かれたとみなされる挿絵群である<sup>(30)</sup>。本稿末に掲載した表「フィリップ豪胆公の祈禱者像リスト」は、当該フォリオにおいて豪胆公が描かれた場所、祈禱者像としての表現、祈禱対象、そしてフォリオ中のテキストなどについての情報を、管見の限りでリスト化したものである。18点がおさめられた『フィリップ豪胆公の時禱書』と比べると、『フィリップ豪胆公の祈禱書』の方は2点と少ないが、祈禱書の最初の一葉を飾っている点に、祈禱者像というモチーフの重要性がうかがえる。

『フィリップ豪胆公の大時禱書』において、祈禱者像が最初に登場するのは、ケンブリッジ所蔵本の13表葉（リストNo. 1）になる。主場面の「受胎告知」が大きく描かれるのに対して、祈禱者は下部の、イニシアルDのなかで跪く（図10）。小さな画面であるため、祈禱者が誰であるのかという点については一見特定し難いが、よく見ると豪胆公の特徴的な鼻と顎の形状を認識できる。この写本の当初の所有者がフィリップ豪胆公であったことはもちろん、イニシアルDのすぐ下のバ・ド・パージュ（下辺装飾）にブルゴーニュ公の紋章が描かれていたことも勘案すると<sup>(31)</sup>、祈禱者はフィリップ豪胆公であるとみなしてよいだろう。

ここに描かれた豪胆公は、プロフィールで顔の右半分を見せ、薄い青色に薄紫の服をまとい、開かれた本が載る祈禱台にて跪く。その視線は、上方の「受胎告知」場面に向けられており、祈りのポーズをとる手も上方にあがっている。祈禱者の背後には黄土色のカーテンがかかり、ここが祈りの場であることが強調されているようである。背景には、イニシアルの地模様として、百合の紋章模様が濃紺と青で織りなされている。このイニシアルDから始まるのは、当時、多くの時禱書におさめられた『聖母の時禱』の朝課の冒頭の句「Domine labia mea aperies...（主よ、私の唇を開いて下さい……〔詩編〕51:17）」である<sup>(32)</sup>。

図10以外の祈禱者像は、ほぼ同じ大きさの四角い枠のなかで、小挿絵として描かれている（リストNo. 2～20, 図11～図16）。顔貌は必ずしも精密には描き込まれておらず、フィリップ豪胆公の姿とは断定されない場合もあるものの<sup>(33)</sup>、これらの祈禱者像の髪型や顔のパーツは、イニシアルに描かれた豪胆公も含め、一定程度の類似性が認められるように思われる。また、衣服の色や背景の模様こそ異なるが、祈禱者像はほぼ同じ型の衣服を身につけており、カーテンを背に書を広げた祈禱台に跪き、おおむねプロフィールで祈る姿も共通する。プロフィールに近い4分の3観面で捉えられている場合もあるものの（図16）、祈禱対象より低い位置で恭しく跪くという姿勢も共有されている。

このように祈禱者像をイニシアルや小挿絵に描いたり、統一的なイメージで複数描いたりする方法は、『フィリップ豪胆公の時禱書』において初めて採用されたわけではない。フィリップ豪胆公と挿絵家の置かれていた立場から、『フィリップ豪胆公の大時禱書』のモチーフが、14世紀末のパリとフランス宮廷

の流れを汲んでいた可能性は容易に想像できるであろう<sup>(34)</sup>。その影響は、『受胎告知』下のイニシアルDのなかに祈禱者像を描くという構図にも認められる。それは、すでに14世紀初頭において、画家ジャン・ピュッセルが、フランス王シャルル四世（在位1322～28年）の妻ジャンヌ・デヴルー（1310～71年）に捧げた著名な挿絵に用いた表現であった（図17）。

また、フィリップ豪胆公の兄シャルル五世やベリー公ジャンが注文した時禱書にも、先例とみなしうる描写が見いだされる。とくに、祈禱者が祈禱対象と小挿絵で向かい合う構図の参照源には、『サヴォイアの時禱書』（1375年頃）の挿絵が指摘されている<sup>(35)</sup>。そこには、本の開いた祈禱台を前に、聖アントニウスに跪拝するシャルル五世の姿が描かれている（図18）。ジャン・ド・シの聖書の画家（ボクトーの画家）工房がこの挿絵を手がけたとみなされる点からも、『フィリップ豪胆公の大時禱書』との強い関連性がうかがえるであろう。

同様に興味深いのは、『フィリップ豪胆公の大時禱書』と同時期に着手された『ベリー公の小時禱書』である。ここには、跪き祈るベリー公ジャンの姿が写本内の随所に散りばめられている（図19～図21）<sup>(36)</sup>。『フィリップ豪胆公の大時禱書』よりも祈禱者像の容貌の幅がやや大きいように思われるが、多くの像がプロフィールを見せ、祈禱対象より低い位置で跪拝しており、祈禱台やカーテンなどのモチーフも多用される。『ベリー公の小時禱書』と『フィリップ豪胆公の大時禱書』は、ともに長い制作過程を経た写本であり、どちらの図案が先行していたのかという点は断定し難い。だが少なくとも、祈禱者像というモチーフが14世紀末のヴァロワ家系の王侯貴族の間で好まれ、その表現方法がフィリップ豪胆公にも共有されていたという点は認められるであろう。

では、これらの書においては、なぜ祈禱者の姿が繰り返し描かれたのであろうか。以下では祈禱者像がおさめられた「時禱書」や「祈禱書」の機能という観点から、その意味を考察していきたい。

### （3）祈禱者像の機能

まず、「時禱書」や「祈禱書」がフィリップ豪胆公の時代に担っていた主要な役割について確認しよう。時禱書は、聖職者用の聖務日課書を平易にした祈禱をおさめた書であり、その第一の機能は、平信徒の宗教実践の助けであった。中世後期～末期には、信徒が個人で聖なる存在に祈りを捧げる「個人祈禱」が流行しており、彼らの祈りを補助するための時禱書が大いに人気を博した<sup>(37)</sup>。それは、前述したように豪胆公の時禱書と祈禱書が「公の祈禱室で日々使用するためのもの」として言及されていたことにもうかがえるであろう。

先行研究においては、『ベリー公の小時禱書』や『フィリップ豪胆公の大時禱書』において、テキストと挿絵が関連づけられ、使用者の信仰実践が巧みに促されているさまが分析されている<sup>(38)</sup>。たとえば『ベリー公の小時禱書』には、「教会にいる時は時禱を唱えること」など、使用者の信仰実践を指南するような言葉が含まれる<sup>(39)</sup>。挿絵には、ベリー公が一人で黙想する場面（図19、図21）や、祭服をまとった司祭の後方でミサに参加する場面（図20）も頻繁に描かれるが、それらは前後のテキストと対応する表現となっている。本稿では、リストに挙げたフィリップ豪胆公の祈禱者像が、「聖母へのとりなしの祈禱」の前では聖母子へ祈り（No. 4／図11）、「茨の冠へのとりなしの祈禱」の前では茨の冠へ跪く（No. 6／図13）など、祈りのテキストと密接に関係していることを指摘しておきたい。ここから、祈禱者像は、ミサに出席したり、聖なる人物と直接向かい合い祈ることのできる信仰実践の「モデル」として、この時禱書の読者であり使用者である公の信心を促し、テキストに没頭させる役割を担っていたとみなすことができるであろう。

以上の検討からは、時禱書類の挿絵に繰り返された祈禱者像が、使用者の「モデル」として信仰実践の

助けとなっていたことが推察された。この点に注目すると、写本に描かれた祈禱者像は、聖堂扉口に設置された彫刻の祈禱者像や、多数のコピーが流布した板絵の肖像などとは異なり、支配者としての立場を称揚するよりも私的な空間での信仰を担う性格が強かったと捉えられるかもしれない。

だが、仮にそのような傾向があったとしても、フィリップ豪胆公の従者や宮廷人たちが、公が時禱書を使用する姿を常に目撃していた可能性は考慮されるべきであろう。上述したように、ブルゴーニュ公の所蔵品は、後継者へと受け継がれるばかりでなく、贈り物として利用されることもあった。それゆえに、やはり祈禱者像にも、第三者への意識が反映されていても不思議ではないであろう。時禱書内に繰り返し登場する公のイメージは、使用者であるブルゴーニュ公の祈りの実践を助けると同時に、公が熱心に祈る敬虔な信徒であることを他者に誇示する役割も有していたのではないだろうか。

祈禱者像が担った役割は、フィリップ豪胆公のコレクションの継承者であるフィリップ善良公の祈禱者像にも引き継がれたように思われる。以下では、善良公の祈禱者像の分析を通して、ブルゴーニュ公の祈禱者像がどのように受け継がれていったのかという点を検討したい。

### 3. ブルゴーニュ公国における祈禱者像の継承

フィリップ善良公の肖像と祈禱者像を検討するにあたり、まず確認しておきたいのは、肖像表現の形式が、善良公の時代に大きく変化したという点である<sup>(40)</sup>。すでに別稿で論じたように、フィリップ豪胆公(図1～図3)およびジャン無畏公の肖像(パリ、ルーヴル美術館)は、当時のフランス王家の伝統に従ってプロフィールで捉えられている。それに対して、フィリップ善良公の肖像は、ほぼすべてが4分の3観面で表わされるのである(図22～図25)<sup>(41)</sup>。それは祈禱者像はもちろん、写本の作者が作品を捧げる場面を表わす献呈頁においても同様である。ここでは、献呈を受ける公の支配者としての威厳が正面観などによって強調されるべきところであるが、公は4分の3観面を保ちつつ、身体を正面に向けている(図23)<sup>(42)</sup>。このような傾向は、もちろん、善良公の代以降に、ロヒール・ファン・デル・ウェイデンをはじめとする初期フランドルの画家たちがブルゴーニュ公の肖像制作に携わるようになったこととも無縁ではない<sup>(43)</sup>。

本稿の文脈において興味深いのは、フィリップ善良公の肖像と祈禱者像が、画一的とも言えるほど徹底的に統一されたイメージで表わされるという点である。同一写本内でもさまざまに衣服の色を変えた豪胆公とは対照的に、善良公はどの媒体においてもほぼ常に黒い衣服をまとい、首には自身が1430年に創設した金羊毛騎士団の勲章(頸章)を下げている。

フィリップ善良公がまとう黒の衣服は、まずは1419年に暗殺されてしまったジャン無畏公に対する喪の意が示されているとみなされるところだが<sup>(44)</sup>、善良公が、父への喪の表明を契機としつつ、すでに流行していた黒をさらに広める主体者となったという点も見過ごされるべきではない。豪胆公や無畏公の服飾と比べると、一見控えめなようにも思われる善良公の黒の衣服であるが、じつは毛皮で縁取られた光沢あるベルベットや繊細なダマスク織の布地があてられるなど、装飾性の強さもたしかに認められる。そこには、祈禱者像であっても、流行の牽引者として、自身の富やステイタスを明示したいと願うフィリップ善良公の意向が反映されているのではないだろうか。自身の権威を示すという意識は、紋章で飾られた祈禱台や、X字型の「聖アンドレの十字架」や火打ち石などの公国のドゥヴィーズ、さらにはフィリップがよく用いたEのイニシアルなどが描き込まれたカラフルな天幕や床にもうかがえる(図24、図25)<sup>(45)</sup>。他にも、「AUTRE N'AURAY (他の者を持たぬ)」などのモットーも利用されていることから、フィリップの姿には、豪胆公の時代よりも一層明示的に、公としてのステイタスが強調されていると言えるであろう<sup>(46)</sup>。



祈禱者像表現という観点からは、善良公の描写において挿絵が一葉に占める割合が増していることや、跪く善良公と祈禱対象との関係がより対等に近くなっている点も重要である。フィリップ豪胆公やベリー公ジャンの代では、祈禱者像の多くは小挿絵のなかに描かれたが、フィリップ善良公の祈禱者像は、一葉の半分以上を占める挿絵に描かれた例も多い（図24、図25）。また、ベリー公や豪胆公は、祈禱対象に対して低い位置に下がり恭しく跪拝していたが、善良公は、祈禱対象との高さの差を縮めるばかりか、祈禱対象と画面を二分する場合すらある。さらに、公国の聖人アンドレのいる建物に、跪くフィリップを囲む天幕の左側の布地をからめたり（図24）、聖母マリアのたたずむ建物の柱とフィリップの天幕二ヶ所を紐によって結んだりするなど（図25）、善良公の跪く場と祈禱対象のいる建造物を物理的に結びつける描写も見られる。後者の挿絵においては、建物のタイルに火打ち石のドゥヴィーズが表わされていることによっても祈禱対象との関係が強調されている。

このように、フィリップ善良公の祈禱者像においては、像主フィリップが単なる平信徒の一人ではなく富と権力を誇る支配者であることが、ドゥヴィーズなどのモチーフと、祈禱者が祈る場の描写によって強調されている。とくに、その徹底した定型イメージには、一種のブランド力をもって自身の権威を確実に示そうとする善良公の意識が反映されているように思われる。それゆえに、善良公の祈禱者像表現は、フィリップ豪胆公の時代よりも明確になったと位置づけることができるであろう。

ここで再び、『フィリップ豪胆公の大時禱書』の祈禱者像に立ち戻ってみよう。前述したように、この書には、15世紀中頃に、テキストと挿絵が追加された。ケンブリッジ所蔵本に加えられた挿絵には、この追加編纂に携わったフィリップ善良公の肖像も一点含まれる。それは、一葉の半分以上を占める挿絵であり、場面には聖グレゴリウスのミサと、イエスや受難具が祭壇上に立ち現れるという奇跡が色鮮やかに描かれている（図26、図27）。フィリップ善良公は、カーテンで隔てられた右側の小部屋で、他のフィリップの祈禱者像と同じように、毛皮で縁取られた黒い服をまとい、祈禱台を前に跪く。その足を載せるカーペットには、彼の紋章の柄も表わされている。だが、きわめて特異なことに、その観面はプロフィールで捉えられている。

「『アレクサンダー大王』の画家」と称されるこの挿絵の作者は、1445～55年頃にブリュージュで活躍した<sup>(47)</sup>。フィリップ善良公の祈禱者像のなかでは比較的早い時期に描かれているが、すでに4分の3観面の肖像が一世を風靡していた時期である。それにもかかわらず、善良公の姿がこのようにプロフィールで描かれた理由には、時禱書の最初の注文主でありブルゴーニュ公国の偉大な始祖でもある祖父フィリップ豪胆公への敬意や、既存の挿絵との統一感も優先するという制作上の配慮がなされたことも考えられるだろう。そこには同時に、善良公と写本挿絵家たちが『フィリップ豪胆公の大時禱書』の既存の挿絵を参照しつつ独自の表現コードを確立させていったという試行錯誤の過程もうかがえるのではないだろうか。

前例を踏まえた漸進的な変化は、同一書内に繰り返し祈禱者を登場させるという表現にも認められる。『フィリップ豪胆公の大時禱書』ほど頻繁ではないが、『フィリップ善良公の時禱書』（ハーグ、オランダ王立図書館、MS 76, F2）においてフィリップの姿は8回繰り返されている。また、『フィリップ善良公の祈禱書』（ミュンヘン、バイエルン州立図書館、Cod. gall., 40）では4回、『フィリップ善良公の時禱書』（ウィーン、オーストリア国立図書館、Cod. 1800）および『フィリップ善良公の聖務日課書』（ブリュッセル、ベルギー王立図書館、MS 9026, 9511）でも祈るフィリップが各3回登場している<sup>(48)</sup>。この点からも、善良公が、伝統を継承しつつもブルゴーニュ公としての確かな「ブランド」の表現を探究していたことがうかがえるのである。



## おわりに

本稿では、『フィリップ豪胆公の大時禱書』群に描かれた豪胆公の祈禱者像と、本時禱書を継承したフィリップ善良公の祈禱者像の分析を通して、ブルゴーニュ公の祈禱者像の特徴と、その継承の様相を探った。その結果、類似したイメージを複数提示するという豪胆公の祈禱者像の描写を経て、フィリップ善良公の祈禱者像においては、支配者としての権威を誇示する表現コードが明確に示されたことがうかがえた。このようなフィリップ善良公の祈禱者像が少なからぬ影響を及ぼしたであろうことは、15世紀後半のブルゴーニュ宮廷やフランドル社会の様々な階層において、自己称揚的な祈禱者像が表わされていたことから推察される<sup>(49)</sup>。

フィリップ善良公の祈禱者像が獲得したブランド・イメージは、四代目ブルゴーニュ公シャルルの描写にも継承された。シャルルの描写において、4分の3観面に黒い衣服をまとい金羊毛騎士団の頸章を下げるというフィリップの表現方法はほぼ踏襲されている（ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《シャルル突進公》ベルリン、国立絵画館など）が、作品によっては、服装に独自の工夫も認められる（ウィレム・ヴレランと工房《祈禱者シャルル突進公夫妻》コペンハーゲン、王立図書館、Ms. Gl. Kgl. 1612, 4<sup>o</sup>, fol. 1v. など）<sup>(50)</sup>。これらのシャルル突進公の姿にも、ブルゴーニュ公が、公としての自身のイメージをいかに示すかという課題に真摯に取り組んだ証左を見いだすことができるであろう。

## 註

- (1) ブルゴーニュ公国の歴史全般については、主に以下を参照。Joseph Calmette, *Les Grands ducs de Bourgogne*, Paris, 1949（ジョゼフ・カルメット、田辺保訳『ブルゴーニュ公国の大公たち』国書刊行会、2000年）；堀越孝一『ブルゴーニュ家—中世の秋の歴史—』講談社、1996年；Bertrand Schnerb, *L'État bourguignon 1363-1477*, Paris, 2005 [1999]。
- (2) Werner Paravicini, "The Court of the Dukes of Burgundy: A Model for Europe?," in Ronald G. Asch & Adolf M. Birke, eds., *Princes, Patronage, and the Nobility*, Oxford, 1991, pp. 69-102.
- (3) Exh. Cat., *Art from the Court of Burgundy: The Patronage of Philip the Bold and John the Fearless*, Stephen N. Fliegel & Sophie Jugie, Musée des Beaux Arts, Dijon/ Cleveland Museum of Art, Cleveland, 2004.
- (4) Calmette, *op. cit.*, pp. 89-102, in part. pp. 91-93（カルメット、前掲書、100-113頁、とくに102-103頁）；Georges Doutrepont, *La Littérature française à la cour des ducs de Bourgogne: Philippe le Hardi, Jean sans Peur, Philippe le Bon, Charles le Téméraire*, Genève, 1970；Georges Doutrepont, *Inventaire de la "bibliothèque" de Philippe le Bon (1420)*, Genève, 1977；Bernard Bousmanne & Céline van Hoorebeeck, eds., *La Librairie de ducs de Bourgogne: manuscrits conservés à la Bibliothèque royale de Belgique*, 5vols., Turnhout, 2000-15。フィリップ豪胆公の所蔵書については、とくに以下を参照。Muriel J. Hughes, "The Library of Philip the Bold and Margaret of Flanders, First Valois Duke and Duchess of Burgundy," *Journal of Medieval History*, 4, 1978, pp. 145-188；Patrick M. de Winter, *La Bibliothèque de Philippe le Hardi, Duc de Bourgogne*, Paris, 1985.
- (5) フィリップ豪胆公の生涯については、主に以下を参照。Calmette, *op. cit.*, pp. 48-88（カルメット、前掲書、55-99頁）；Richard Vaughan, *Philip the Bold: the Formation of the Burgundian State*, new ed., Woodbridge, 2002。百年戦争については以下を参照。城戸毅『百年戦争—中世末期の英仏関係—』刀水書房、2010年。
- (6) "...par quoy acquist lors le nom, qui puis ne lui chay, que on le disoit Phelippe le Hardi...", Suzanne Solente, éd., Christine de Pisan, *Le Livre des fais et bonnes meurs du sage roy Charles V*, Paris, 1936-40, I, pp. 144-145.
- (7) Millard Meiss, *French Painting in the Time of Jean de Berry: The Late Fourteenth Century and the Patronage of the Duke*, London, 1967, pp. 92-95；Exh. Cat., *Art from...., op. cit.*, pp. 38-39.
- (8) "...habile en l'art de gouverner, prince de très grant savoir, de grant travail et grant volonté de l'augmentation, bien et accroissement de la couronne de France...", De Pisan, *op. cit.*, I, pp. 145-146.
- (9) Vaughan, *op. cit.*, p. 188.
- (10) 14～15世紀のヨーロッパにおけるタペストリー生産については以下を参照。J. Lestocquoy, *Deux siècles de l'histoire de la tapisserie (1300-1500)*, Arras, 1978；Thomas P. Campbell, *Tapestry in the Renaissance: Art and Magnificence*, London/

New Heaven, 2002, in part. p. 31.

- (11) シャンモル修道院については、とくに以下を参照。Exh.Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 166-181; Schnerb, *op.cit.*, pp. 125-133.
- (12) Exh.Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 222-235.
- (13) 以下の書は、フィリップ豪胆公が1403年の新年の贈り物として60名の騎士たちに授けた品々の分析を通して、支配者による贈与の実態を考察している。Carol Chattaway, *The Order of the Golden Tree: The Gift-Giving Objectives of Duke Philip the Bold of Burgundy*, Turnhout, 2006.
- (14) Scot McKendrick, "Tapestries from the Low Countries in England during the Fifteenth Century," Caroline Barron & Nigel Saul, eds, *England and the Low Countries in the Late Middle Ages*, London, 1995, pp. 43-60, in part. p. 54.
- (15) パリで1400年頃に制作されたと推定されるメダイヨン（図2）は、フィリップ豪胆公の他の肖像と類似する容貌を呈しているものの、金羊毛と思われるペンダントトップを下げているため、金羊毛騎士団を設立したフィリップ善良公と同定されたこともあった。Exh. Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 179-181.
- (16) Exh. Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 130-131.
- (17) Exh. Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 35-37.
- (18) ブルゴーニュ公のドゥヴィーズの使用とその意味については、以下を参照。Exh.Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 81-83; Michel Pastoureaux, "Armoiries, devises, emblèmes: Usages et décors héraldiques à la cour de Bourgogne et dans les Pays-Bas méridionaux au XV<sup>e</sup> siècle," dans Exh.Cat., *Miniatures flamandes, 1404-1482*, Bernard Bousmanne & Thierry Delcourt, eds., Bibliothèque nationale de France/ Bibliothèque royale de Belgique, Paris/ Bruxelles, 2011, pp. 89-102. また、ポワティエ大学の「西洋中世ドゥヴィーズデータベース（La base DEVISE）」も参照。http://base-devise.edel.univ-poitiers.fr/index.php（2019年12月5日閲覧）
- (19) シャンモル修道院の肖像彫刻については、以下を参照。Exh.Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 175-178; Schnerb, *op.cit.*, pp. 125-133.
- (20) フィリップ豪胆公の信仰については、以下を参照。Exh.Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 71-74.
- (21) ケンブリッジとブリュッセルに分蔵される『フィリップ豪胆公の大時禱書』（ブリュッセルの『フィリップ豪胆公の祈禱書』〔MS 10392〕も含む）については、主に以下を参照。Meiss, *op.cit.*, pp. 109, 128, 156, 175, 188; Hughes, *op.cit.*, p. 174; Francis Wormald & Phyllis M. Giles, *A Descriptive Catalogue of the Additional Manuscripts in the Fitzwilliam Museum Acquired between 1895-1979 (excluding the McClean Collection)*, Cambridge, 1982, pp. 479-499; Patrick M. de Winter, "The Grandes Heures of Philip the Bold, Duke of Burgundy: The Copyist Jean L'Avenant and His Patrons at the French Court," *Speculum*, 57, 1982, pp. 786-842; De Winter, *op.cit.*, 1985, pp. 182-194; Bernard Bousmanne, "Item a Guillaume Wyelant aussi enlumineur": Willem Vrelant, un aspect de l'enluminure dans les Pays-Bas méridionaux sous le mécénat des ducs de Bourgogne Philippe le Bon et Charles le Téméraire, Turnhout, 1997, pp. 242-246; Bousmanne & Hoorebeeck, eds., *op.cit.*, Vol. 1, pp. 229-242, 264-272; Exh.Cat., *Art from..., op.cit.*, pp. 105-109; Nigel Morgan & Stella Panayotova, eds., *A Catalogue of Western Book Illumination in the Fitzwilliam Museum and the Cambridge Colleges, Part One, Vol. 1: The Frankish Kingdoms, Northern Netherlands, Germany, Bohemia, Hungary, Austria*, London et al., 2009, pp. 90-97; Thomas Kren & Scot McKendrick, *Illuminating the Renaissance: The Triumph of Flemish Manuscript Painting in Europe*, Los Angeles, 2003, pp. 212-213; Margaret Manion, "The Princely Patron the Liturgy: Mass Texts in the Grandes Heures of Philip the Bold," *The Cambridge Illuminations: The Conference Papers*, London, 2007, pp. 193-203; Hanno Wijsman, *Luxury Bound*, Turnhout, 2010, pp. 234-235. 各所蔵先が提供している以下のサイトも参照。https://uurl.kbr.be/1768538（2019年12月15日閲覧）; https://webapps.fitzmuseum.cam.ac.uk/explorer/index.php?oid=170618（2019年10月1日閲覧）
- (22) De Winter, *op.cit.*, 1985; Exh.Cat., *Art from..., op.cit.*, p. 108.
- (23) https://webapps.fitzmuseum.cam.ac.uk/explorer/index.php?oid=170618（2019年10月1日閲覧）
- (24) "Item, deux grans livres des heures de Nostre Dame, de la croix, du Saint Esprit, des mors et plusieurs oroisons et autres suffrages, servans tous les jours en l'oratoire de mondit seigneur..." De Winter, *op.cit.*, 1985, p. 127, no. 25.
- (25) Morgan & Panayotova, *op.cit.*, p. 97.
- (26) De Winter, *op.cit.*, 1985, pp. 189-193; Bousmanne & Hoorebeeck, eds., *op.cit.*, Vol. 1, pp. 241, 271; Exh. Cat., *Art from..., op.cit.*, p. 107. なお、フィリップ善良公の時代に作成された1420年の目録にも、この二書に関連する記述が残される。Doutrepoint, *op.cit.*, 1977, pp. 4-5 (no. 4 & no. 5). このうち、目録no. 4の記述はブリュッセル所蔵の断片（MS 11035-37）と、no.5の記述はブリュッセル所蔵の『フィリップ豪胆公の祈禱書』（MS 10392）と関連づけられる。
- (27) たとえばジャン無畏公没後まもなく、未亡人のために本写本の編纂が行われた可能性などが指摘されている。De Winter, *op.cit.*, 1985, pp. 182-194.

- (28) Wormald & Giles, *op.cit.*, pp. 496-499.
- (29) Bousmanne & Hoorebeeck, éds., *op.cit.*, vol. 1, pp. 229-242, 264-272.
- (30) <https://uurl.kbr.be/1768538> (2019年12月15日閲覧) ; <https://webapps.fitzmuseum.cam.ac.uk/explorer/index.php?oid=170618> (2019年10月1日閲覧)
- (31) Morgan & Panayotova, *op.cit.*, p. 91.
- (32) 時禱書の構成と役割については、とくに以下を参照。Roger S. Wieck, *Painted Prayers: the Book of Hours in Medieval and Renaissance Art*, New York, 1997, in part. pp. 51-59, 138.
- (33) De Winter, *op.cit.*, 1982 & 1985, *passim*.
- (34) 14世紀末にかけてのパリの芸術と文化については、とくに以下を参照。Meiss, *op.cit.*, *passim*; Exh.Cat., *Paris 1400: les arts sous Charles VI*, Musée du Louvre, Paris, 2004.
- (35) De Winter, *op.cit.*, 1982, p. 803.『サヴォイアの時禱書』の成立事情と構成については、以下を参照。Paul Durrieu, “Notice d’un des plus importants livres de prières de Charles V: *Les Heures de Savoie* ou « Très belles grandes heures »,” *Bibliothèque de l’école des chartes*, 72, 1911, pp. 500-555; Roger S. Wieck, “The Savoy Hours and its Impact on Jean, Duc de Berry,” *Yale University Library Gazette*, 66, 1991, pp. 159-180.
- (36) 『ベリー公の小時禱書』については、主に以下を参照。Meiss, *op.cit.*, pp. 155-193; Carol J. Purtle, “The Iconography of Prayer, Jean de Berry, and the origin of the Annunciation in a Church,” *Simiolus*, 20, 1990-91, pp. 227-239, in part. pp. 230-231; Wieck, *op.cit.*, 1991, pp. 166-172; Rob Dückers, Pieter Roelofs et al., *The Limbourg Brothers: Nijmegen Masters at the French Court, 1400-1416*, Nijmegen, 2005. 挿絵は1375年頃にジャン・ル・ノワールによって開始されたが、ル・ノワールの死により中断され、おそらく1385年頃にジャックマール・ド・エダンと助手たちによって再開された。
- (37) 15世紀フランドルにおける個人祈禱の流行と絵画表現については、以下を参照。Sixten Ringbom, “Devotional Images and Imaginative Devotions,” *Gazette des Beaux-Arts, 6<sup>e</sup> pér.*, 73, 1969, pp. 159-170; 今井澄子「15世紀フランドル絵画における祈祷者とヴィジョン—中世末期のキリスト教社会におけるイメージの役割をめぐる一考察—」『西洋中世研究』No.1、2009年、123-140頁。
- (38) Manion, *op.cit.*, pp. 193-203.
- (39) たとえば、13葉裏には以下のように記されている。“...Et quant l’en est en l’eglize, l’en doit dire ces heures...” Purtle, *op.cit.*, pp. 231-232.
- (40) フィリップ善良公の時代と彼の芸術保護については、主に以下を参照。Jeffrey Chipps Smith, *The Artistic Patronage of Philip the Good*, Ph.D. Diss., Columbia University, 1979; Christiane van den Bergen-Pantens et al., éds., *L’ordre de la Toison d’or, de Philippe le Bon à Philippe le Beau (1430-1505) : idéal ou reflet d’une société?*, Turnhout, 1996; Maurits Smeyers, *Flemish Miniatures from the 8th to the mid-16th Century*, Turnhout, 1999; Richard Vaughan, *Philip the Good: The Apogee of Burgundy*, new ed., Woodbridge, 2002; Wim Blockmans et al., *Staging the Court of Burgundy*, Turnhout, 2013.
- (41) 今井澄子「フィリップ善良公の祈禱者像—初期ネーデルラント美術における聖俗・公私の交錯—」『移ろう形象と越境する芸術—小林頼子先生退職記念論文集—』八坂書房、2019年、173-203頁; 今井澄子「二代目ブルゴーニュ公ジャンの肖像と祈禱者像」『大阪大谷大学 歴史文化研究』第19号、2019年、1-19頁。
- (42) フィリップ善良公の献呈図には多数のヴァージョンが残される。以下に詳しい。Pascal Schandel, “Les images de dédicace à la cour des ducs de Bourgogne: Ressources et enjeux d’un genre,” dans Exh.Cat., *Miniatures flamandes*, *op.cit.*, pp. 66-80.
- (43) フィリップ善良公の板絵の肖像画は三タイプあり、そのうち二タイプの原型はロヒール・ファン・デル・ウェイデンにある。Élodie de Zutter, “L’exception qui confirme la règle: contribution à l’étude des portraits de Philippe le Bon, Duc de Bourgogne,” *Revue belge d’archéologie et d’histoire de l’art*, 83, 2014, pp. 5-50. 4分の3観面を特徴とする初期フランドル絵画の肖像表現については、以下を参照。Guy Bauman, “Early Flemish Portraits 1425-1525,” *The Metropolitan Museum of Art Bulletin*, 43, 1986, pp. 1-64.
- (44) “Et le duc bourgongnon ... toutesvoies n’estoit vestu encores que de noir, ...” Kervyn de Lettenhove, éd., *Œuvres de Georges Chastellain*, I, Bruxelles, 1863, pp. 187-188; 徳井淑子「フィリップ善良公の“涙の文様の黒い帽子”—中世末期のモード・文学・感性—」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第50巻、1997年、333-335頁。以下も参照。Sophie Jolivet, “Le phénomène de mode à la cour de Bourgogne sous Philippe le Bon: l’exemple des robes de 1430 à 1442,” *Revue du Nord*, 365, 2006, pp. 331-345; Sophie Jolivet, “La construction d’une image: Philippe le Bon et le noir (1419-1467),” *Apparence(s)*, 2015. <https://apparences.revues.org/1307> (2019年12月10日閲覧)
- (45) 「二つのE」は1453年頃から用いられたが、その由来は解明されていない。Van den Bergen-Pantens et al., *op.cit.*, p. 105.



- (46) Pastoureau, *op.cit.*, pp. 89-102; 今井、前掲書（「フィリップ善良公…」）。
- (47) <https://webapps.fitzmuseum.cam.ac.uk/explorer/index.php?oid=170618>（2019年10月1日閲覧）
- (48) 今井、前掲書（「フィリップ善良公…」）。
- (49) 初期フランドル絵画の祈禱者像の展開については以下の拙著を参照。今井澄子『聖母子への祈り ―初期フランドル絵画の祈禱者像―』国書刊行会、2015年。
- (50) 今井澄子「ブルゴーニュ公シャルル・ル・テメレールの祈禱者像」『大阪大谷大学 歴史文化研究』第16号、2016年、1-20頁; 今井、前掲書（「フィリップ善良公…」）。

#### 【図版出典一覧】

- 図1～図5 Exh.Cat., *Art from the Court of Burgundy*, Cleveland, 2004.
- 図6～図9、図18 P. de Winter, *La Bibliothèque de Philippe le Hardi duc de Bourgogne*, Paris, 1985.
- M. Smeyers, *Flemish Miniatures from the 8th to the Mid-16th Century*, Turnhout, 1999.
- 図10～図14、図16 ©The Fitzwilliam Museum, Cambridge.
- 図15、図20～図21 M. Meiss, *French Painting in the Time of Jean de Berry: The Late Fourteenth Century and the Patronage of the Duke*, London, 1967.
- 図17 <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/4/48/Pucelle.jpg>
- 図19 R. Dücker, P. Roelofs et al., *The Limbourg Brothers*, Nijmegen, 2005.
- 図22 Exh.Cat., *Splendour of the Burgundian Court*, Brussels, 2009.
- 図23、図25 Exh.Cat., *Miniatures flamandes*, Paris/ Bruxelles, 2011.
- 図24 *Le Faste des Ducs de Bourgogne, Dossier de l'art*, 44, 1997-98.
- 図26～図27
- [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Grandes\\_Heures\\_of\\_Philip\\_the\\_Bold\\_-\\_Fitzwilliam\\_Ms3-1954\\_f253v\\_\(Mass\\_of\\_St\\_Gregory\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Grandes_Heures_of_Philip_the_Bold_-_Fitzwilliam_Ms3-1954_f253v_(Mass_of_St_Gregory).jpg)

【附記】本研究は、JSPS 科研費 19K00186、および大阪大谷大学特別研究費の助成を受けました。記して謝意を表します。

## 表：フィリップ豪胆公の祈禱者像リスト

※『フィリップ豪胆公の大時禱書』は、以下に分蔵されている。

- ・『フィリップ豪胆公の大時禱書』パリ、1376～78年頃／パリ、1390年頃／ブリュッセル、1450～55年頃、25.3×17.8cm、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、MS 3-1954.
- ・『フィリップ豪胆公の祈禱書』パリ、1376～78年頃、28.4×20.4cm、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、MS 10392.
- ・『フィリップ豪胆公の大時禱書』の断片、パリ、1376～78年頃／ブリュッセル、25×17cm、1450年頃、25×17cm、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、MS 11035-37.

※リストNo. 1-18：ケンブリッジ所蔵、No. 19-20：ブリュッセル所蔵（MS 10392）

No.	フォリオ／祈禱者の描かれる場所	祈禱者フィリップ豪胆公の表現	挿絵中の祈禱対象	テキスト／備考
1 (図10)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 13r. (以下 No. 18までケンブリッジ所蔵本)</li> <li>・ イニシアルD</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィールで上部を見上げる。</li> <li>・ 薄い青色の服に薄紫の上着をまとう。</li> <li>・ 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> <li>・ 百合の紋章模様（背景）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 《受胎告知》(fol.13r.の主要挿絵)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖母の時禱。</li> <li>・ バ・ド・パージュには、獅子に支えられたブルゴーニュ公の紋章が描かれていた（ほぼ消失）。</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 57r.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィールに近い4分の3観面。</li> <li>・ 青い衣服をまとう。</li> <li>・ 磔刑像のある祭壇へと続く7段の階段の下で、手を交差させつつ跪く。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祭壇上の磔刑像</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ グラドゥアーレの詩編。</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 213r.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 4分の3観面。</li> <li>・ 赤い服に青い上着をまとう。</li> <li>・ 司祭が唱えるミサに出席する。</li> <li>・ 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖杯が載る祭壇</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ミサの祈禱。</li> </ul>
4 (図11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 226r.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィール。</li> <li>・ 薄紫の衣服をまとう。</li> <li>・ 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖母子</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖母へのとりなしの祈禱。</li> </ul>
5 (図11)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 226r.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィール。</li> <li>・ 薄い青色の衣服をまとう。</li> <li>・ 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 磔刑のキリスト</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖十字架へのとりなしの祈禱。</li> </ul>
6 (図12) (図13)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 226v.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィール。</li> <li>・ 薄いピンク色の衣服をまとう。</li> <li>・ 祈禱台にて跪き、書を持つ。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 茨の冠と頭部の聖遺物が載る祭壇</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 茨の冠へのとりなしの祈禱。</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 227v.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィール。</li> <li>・ 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 洗礼者ヨハネ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 洗礼者ヨハネへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 230r.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィール。</li> <li>・ 薄いピンク色の衣服をまとう。</li> <li>・ 祈禱台にて跪き、書を読む。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖ペテロ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖ペテロへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
9 (図14)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ fol. 230v.</li> <li>・ 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プロフィール。</li> <li>・ 薄藍色の衣服をまとう。</li> <li>・ 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>・ 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖パウロ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 聖パウロへのとりなしの祈禱。</li> </ul>

10	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 231r.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 薄いピンク色の衣服をまとう。</li> <li>• 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖大ヤコブ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖大ヤコブへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 231v.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 薄いピンク色の衣服をまとう。</li> <li>• 祈禱台にて跪き、書を読む。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖バルトロマイ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖バルトロマイへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 232r.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 赤色の衣服をまとう。</li> <li>• 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖シモン</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖シモンへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
13	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 232r.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 青色の衣服をまとう。</li> <li>• 祈禱台にて跪き、書を読む。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖ユダ（タダイ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖ユダへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
14 (図15)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 232v.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖アンドレ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖アンドレへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 233r.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 青色の衣服をまとう。</li> <li>• 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖マサイアス</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖マサイアスへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
16	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 233v.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 祈禱台にて跪き、書を読む。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖小ヤコブ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖小ヤコブへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
17	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 233v.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 祈禱台にて跪き、書を読む。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖フィリポ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖フィリポへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
18	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 234v.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィール。</li> <li>• 青色の衣服に薄紫の上着をまとう。</li> <li>• 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖バルナバ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖バルナバへのとりなしの祈禱。</li> </ul>
19 (図16)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol.1v.（以下ブリュッセル所蔵本）</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィールに近い4分の3観面。</li> <li>• 祈禱台にて跪き、書を読む。</li> <li>• 青い衣服をまとう。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 神と天使たち</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 準備の祈禱。</li> </ul>
20	<ul style="list-style-type: none"> <li>• fol. 38v.</li> <li>• 小挿絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• プロフィールに近い4分の3観面。</li> <li>• 開かれた本の載る祈禱台にて跪く。</li> <li>• 薄紫の衣服をまとう。</li> <li>• 後方にカーテン。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖母子</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 聖母の喜びの祈禱。</li> </ul>





図1 《フィリップ豪胆公》17世紀、42×28cm、ディジョン美術館



図2 《フィリップ豪胆公》パリ、1400年頃、ミュンヘン、レジデント、宝物室



図3 《フィリップ豪胆公》15世紀末、アラバスター、ディジョン美術館



図4 クラウス・スリュートル《聖母子とフィリップ豪胆公夫妻》1385-1401年、シャンモル、カルトウジオ修道院聖堂扉



図5 ジャン・ド・マルヴィル、クラウス・スリュートル、クラウス・ド・ウェルヴ《フィリップ豪胆公の墓》1384-1410年、243×254×360cm、白・黒大理石に彩色／アラバスターに鍍金、ディジョン美術館





図6 パリの画家《ブルゴーニュ公領をフィリップ豪胆公に認めるフランス王》1408年頃、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、MS 3, fol. 414v.



図7 ブシコーの画家工房《フィリップ豪胆公とマルグリット・ド・フランドルの結婚》『フランス大年代記』1415年頃、ロンドン、大英博物館、MS Cotton Nero E. II, fol. 217r.



図8 《シャルル5世に拍車を贈るフィリップ豪胆公》『シャルル5世の戴冠本』1365年、ロンドン、大英図書館、MS Cotton Tiberius B. VIII, fol. 48v.

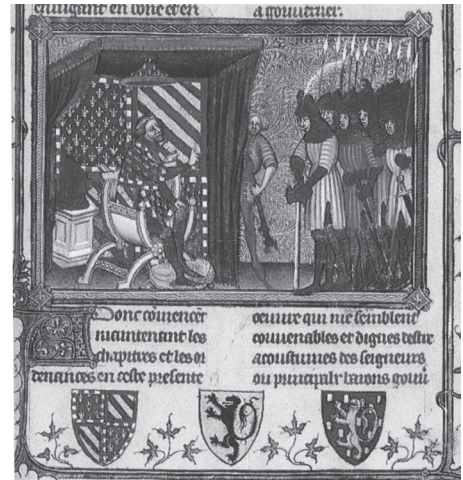


図9 《兵士に指示するフィリップ豪胆公》『貧富論』1384-1404年、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、MS 11042, fol. 12r.

図10 ジャン・ド・シの聖書の画家《祈禱者フィリップ豪胆公》(《受胎告知》のイニシアル)『フィリップ豪胆公の大時禱書』パリ、1376-78年頃、25.3×17.8cm、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、MS 3-1954, fol. 13r.



図11 大時禱書の画家《祈禱者フィリップ豪胆公》『フィリップ豪胆公の大時禱書』パリ、1376-78年頃、25.3×17.8cm、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、MS 3-1954, fol. 226r.

図12 大時禱書の画家《祈禱者フィリップ豪胆公》『フィリップ豪胆公の大時禱書』パリ、1376-78年頃、25.3×17.8cm、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、MS 3-1954, fols. 226v-227r.

図13 図12部分

図14 慈悲の玉座の画家《祈禱者フィリップ豪胆公》『フィリップ豪胆公の大時禱書』パリ、1376-78年頃、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、MS 3-1954, fol. 230v.

図15 慈悲の玉座の画家《祈禱者フィリップ豪胆公》  
『フィリップ豪胆公の大時禱書』パリ、1376  
-78年頃、25.3×17.8cm、ケンブリッジ、  
フィッツウィリアム美術館、MS 3-1954,  
fol. 232v.

図16 ジャン・ド・シの聖書の画家工房《祈禱者フィ  
リップ豪胆公》『フィリップ豪胆公の祈禱書』  
パリ、1376-78年頃、ブリュッセル、ベルギー  
王立図書館、MS 10392, fol. 1r.



図17 ジャン・ピュッセル《祈禱者ジャンヌ・デヴ  
ルー》(《受胎告知》のイニシアル)『ジャンヌ・  
デヴルーの時禱書』1325-28年頃、ニュー  
ヨーク、メトロポリタン美術館、クロイスター  
ズ・コレクション、fol. 16r.



図18 ジャン・ド・シの聖書の画家工房《祈禱者シャ  
ルル5世と聖アントニウス》『サヴォイアの時  
禱書』1375年頃、ニューヘイブン、イエール  
大学バイネッケ貴重書図書館、MS 390,  
fol. 4r.





図19 偽ジャックマール・ド・エダン《祈禱者ベリー公ジャン》『ベリー公の小時禱書』1385-90年頃、パリ、フランス国立図書館、Ms. lat.18014, fol. 106r.



図20 偽ジャックマール・ド・エダン《祈禱者ベリー公ジャン》『ベリー公の小時禱書』1385-90年頃、パリ、フランス国立図書館、Ms. lat.18014, fol. 172r.



図21 偽ジャックマール・ド・エダン《祈禱者ベリー公ジャン》『ベリー公の小時禱書』1385-90年頃、パリ、フランス国立図書館、Ms. lat.18014, fol. 119r.



図22 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン（コピー）《フィリップ善良公》15世紀後半、32.5×22.4cm、ブリュージュ、市立美術館



図23 ジラール・ド・ルシヨンの画家《フィリップ善良公への献呈》『ジラール・ド・ルシヨンの物語』1448年以降、ウィーン、オーストリア国立図書館、MS 2549, fol. 6r.





図24 ウィレム・ヴレラン（工房）《聖アンドレと祈禱者フィリップ善良公》『フィリップ善良公の聖務日課書』ブリュッセル、ベルギー王立図書館、MS 9026, fol. 258r.



図25 ウィレム・ヴレラン《受胎告知と祈禱者フィリップ善良公》『天使祝詞論』1461年頃、ブリュッセル、ベルギー王立図書館、MS 9270, fol.2v.

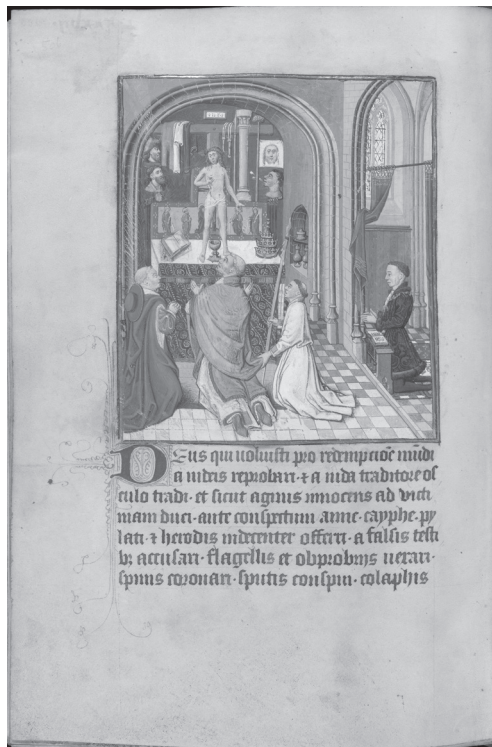


図26 『アレクサンダー大王』の画家《聖グレゴリウスのミサと祈禱者フィリップ善良公》『フィリップ豪胆公の大時禱書』1445-55年頃、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、MS 3-1954, fol. 253v.

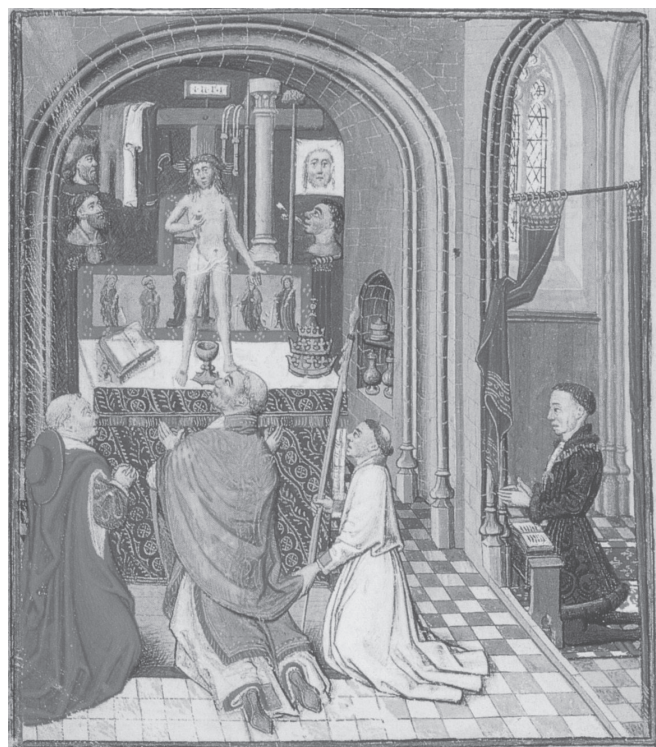


図27 図26部分